

木心からの最大径一八・三センチ。肉身部白色、眉墨毛描き、両まぶたに墨線、顎ひげ薄墨、袍緑。

保存状態 持物、簪、亡失。像底周辺、朽損が著しい。

一 男神像 その三 四太神社旧安置

法 量 像高 三九・〇センチメートル

形 状 巾子冠をかぶり、纓を背に垂らす。顎ひげを伸ばす。袍を着し、拱手して坐す。

品質構造 クスカ、一材製内割りなし。木心は前方に外れる。彩色不明。

保存状態 持物、亡失。両足部が欠失する（朽損）。

一 男神像 その四 四太神社旧安置

法 量 像高 三一・六センチメートル

形 状 巾子冠をかぶり、袍を着す。坐すと思われる。

品質構造 クスカ、一材製。

保存状態 前面すべて欠失（朽損）。

一 男神像 その五 一挙社旧安置

法 量 像高 四九・四センチメートル

形 状 巾子冠をかぶり、袍を着す。拱手して坐す。

品質構造 クスカ、一材製、内割りなし。木心は中央を通る。推定木心

からの最大径一六・二センチ。漆塗り。

保存状態 持物、亡失。前面、朽損が著しい。両足部が欠失する（朽損）。

一 男神像 その六

法 量 像高 四〇・八センチメートル

形 状 巾子冠をかぶり、袍を着す。顎ひげをのぼす。笑相。巾子の根本に左右に通る丸孔（木製の棒が残存）。

品質構造 広葉樹か、一材製、内割りなし。木心は像背から外れる。彩色。

保存状態 持物、上部欠失。体部の前面・背面、朽損が著しい。両足部が欠失する（朽損）。

一 男神像 その七

法 量 像高 三三・〇センチメートル

形 状 巾子冠と推定される冠（大部分が亡失）をかぶり、袍を着す。拱手して、坐すと思われる。顎ひげをのぼす。目もと、口もとを上げる（笑相）。

品質構造 クスカ、一材製。彩色。

保存状態 頭部・両体側部・両足部・背面欠失（朽損）。



男神像 その2



男神像 その3



男神像 その4



男神像 その5



男神像 その6

一 僧形神像 その一

法 量 像高 四〇・五センチメートル

形 状 円頂、頸部二道。僧綱襟そうこうえりとなる僧祇支そうぎし（內衣）を右衽に着し、右肩に覆肩衣ふつけんい（横被か）を着し、上に袈裟をまとい左肩から紐で吊る。左手は屈臂くつびし、胸前で持物（棒状のものが残存）を執る。右手は腹前で掌を仰ぐ。

品質構造 ケヤキか、一材製（両手のすべてを含む）、内割りなし。木

心はほぼ中央を通る。木心からの最大径一四・〇センチ。黒

漆塗り、白下地、彩色（詳細不明）。

保存状態 両足部、大部分欠失（朽損）。

一 僧形神像 その二

法 量 像高 三五・三センチメートル

形 状 円頂、僧綱襟となる僧祇支（內衣）を頸もとまでつめて右衽に着し、袈裟をまとう。袍を着すか。右足膝を外側に曲げる。品質構造 ケヤキか、一材製、内割りなし。木心は像背右寄りに通る。木心からの最大径二一・五センチ。黒漆塗り、彩色（詳細不詳）。保存状態 背面、朽損が著しい。左手臂から右上膊部にかけて、下部欠失（朽損）。



男神像 その7



僧形神像 その1



僧形神像 その2



神像形 その1



神像形 その2

附 一 神像形 その一

法 量 像高 二八・〇センチメートル

形 状 袍を着すか。右足膝を外側に曲げる。品質構造 針葉樹か、一材製、内割りなし。保存状態 全体に朽損が著しい。

一 神像形 その二 櫟谷社・宗像社旧安置

法 量 像高 九・九センチメートル

形 状 頭上に髻状のものを著す。天冠台を著す。大袖衣と鰯袖衣を着す。両手を胸前に差し出し蓮台を捧げ坐す。

品質構造 ヒノキか、一材製、内割りなし。木心を像背遠くに外す。

保存状態 彩色、頭髮墨、肉身部緑色、着衣白。

表面全体、損傷。

時代 平安時代後期～鎌倉時代

松尾大社の摂社・末社に安置されていた神像群で、神庫などの整理に伴い調査され、概要が知られるところとなった。月読社には女神像（その二）、櫟谷社・宗像社には女神像（その一・その三）及び神像形（その二）、三宮社には女神像（その四）、衣手社には男神像（その一）、四太神社には男

神像（その三・その四）、一挙社には男神像（その五）、金比羅社に女神像（その五）が伝わった。その他の伝来の詳細については不明である。現在では櫛谷社・宗像社は併祀^{へいし}されており、月読社・櫛谷社・宗像社が摂社、衣手社・一挙社・三宮社・四太神社、金比羅社が末社となっている。

女神像（その二）は特に保存状態がよく、制作も非常に優秀なものである。同時期の仏像に遜色ない本格的な技術を見せており、同時代を代表する神像と評価されよう。また、女神像（その三）像底の銘記は康治二年（一一四三）であり、女神像（その四）の銘文も判読可能な部分から、ほぼ同内容であると推察される。平安時代に遡る神像の造像銘は数例しか知られず、神像の銘としては最古例に属することになる。ここに見える睿与、静仁は仏師と見られ、神像の制作者名が判明する点は貴重である。なお、銘文中に願主として見える秦頼親は大治二年（一一二七）に松尾社神主に任じられた人物であり、松尾社一切経（妙蓮寺蔵）のうち天承元年（一一三一）から保延四年（一一三八）までの書写における願主としても知られている。

全体に共通する構造上の特徴としては、いずれの像も一木造で、多くが木心を含む点が挙げられる。特に女神像（その七）及び僧形神像（その二）が両手先まで共木彫出である点は、一木造への固執を示すと思われる。これは同時代の彫刻と比較すれば異例の構造であり、神像の持つ構造上の傾向として注目される。また、様式について見れば、顔の肉付きが豊かで丸みを帯びており、体軀の抑揚が少なく、衣文が控えめである点が挙げられる。加えてやや前傾の姿勢をとり、肩を丸く処理する像も多いなど、平安時代後期の彫刻の柔和な特色を示しており、制作はおおよそこの時期とみて大過ないであろう。朽損の甚だしい像が多く含まれるものの、現在確認される部分からも優れた造形を見せていたことは明らかであり、神像の優品のまとまった現存作例として全体として価値が高い。また、特色ある造形として男神像（その六）が「へ」字形の眼やめくりあがる唇によって示

している笑相が指摘される。神像中には類品が少なく、古楽面との間に造形上の関係が想定されるものである。

このように、優品としての評価に加え、平安時代に遡る希少な基準作を含む点は注目されるものであり、類例の少ない表現上の特色も見られるなど貴重な神像群と言える。全体としても松尾大社信仰を考察する上で重要な意味を持つものであり、損傷が進んだ像が多いものの、優れた造形を示す像が多数伝えられたことの価値は高く、一括して保存をはかるものである。なお、附の神像形二軀については、制作年代等について検討を要するが、一括しての保存を提案したい。

（中野慎之）

主要参考文献

伊東史朗編集『松尾大社の神影』平成二三年、松尾大社

その他の法量	（単位㎝。現状。巾子冠をかぶるものについては、像高は巾子頂から、髪際高は機からとする。）										
	像高	髪際高	頂・額	面長	面幅	耳張（髪際）	面奥	胸厚	腹厚	臂張	膝張
女神像（その一）	四二・八	三三・六	一一・二	八・八	八・八	一一・六	一一・五	一一・一	一七・三	二五・四	二六・九
女神像（その二）	五五・八	四六・四	一七・九	一一・九	一〇・四	一五・一	一五・七	一四・九	一七・三	三〇・二	四二・三
女神像（その三）	三三・六	二九・五	七・八	六・五	六・三	九・七	九・七	九・四	一	一九・二	二七・五
女神像（その四）	二九・八	二五・七	一〇・六	六・四	五・九	七・三	七・一	七・四	一	一七・五	二二・〇
女神像（その五）	二九・四	二五・四	一〇・六	七・四	六・〇	八・〇	八・〇	六・六	一	一五・九	一七・七
女神像（その六）	三五・一	一	二・六	七・〇	七・九	一	四・四	八・二	九・八	一八・三	一
女神像（その七）	三二・二	二九・一	一〇・六	一	五・三	八・二	九・三	八・〇	一	二二・一	一
男神像（その一）	四二・八	三二・五	一	一	六・四	八・五	九・四	八・七	一	二二・一	二六・七
男神像（その二）	三八・四	二八・五	一	一	六・五	六・二	八・八	八・七	一	一九・七	一
男神像（その三）	三九・〇	三二・七	一	一	六・八	八・九	八・四	七・六	一	一七・五	一
男神像（その四）	三一・六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
男神像（その五）	四九・四	三九・三	二二・四	八・五	八・九	一一・〇	一五・二	一三・八	一	二八・二	一
男神像（その六）	四〇・八	二八・七	一	一	七・三	九・七	九・五	一一・三	一	一	一
男神像（その七）	三三・〇	一	一	一	七・〇	一	一	一	一	一	一
僧形神像（その一）	四〇・五	一	二一・六	一	七・七	一一・六	一〇・三	一四・〇	一五・〇	二六・九	一
僧形神像（その二）	三五・三	一	一	一	一〇・三	一一・〇	一一・二	一三・九	一四・三	二九・八	一
附 神像形（その一）	二八・〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
神像形（その二）	八・〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

唐衣裳装束からぎぬ もしょうぞく 伝東福門院所用 一式（工芸品・指定）

京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町一二
宗教法人靈鑑寺（京都国立博物館寄託）

一	唐衣	萌葱亀甲繫地菊花文二陪織物	一領
一	裳	白穀織地鳳凰桐文彩繪	一腰
一	懸帶	萌葱亀甲繫文浮織地鳳凰桐文繡	二条
一	表着	紅雷文繫地菊花文二陪織物	一領
一	打衣	紅地繁菱文固織物	一領
一	五衣	白地菊唐草文固織物	一領
一	単	紅地幸菱文浮織物	一領
一	下裳	赤平地花樹文繡	一腰
一	長袴	赤精好	二腰
一	打袴	赤平絹	一腰
一	檜扇	金雲鳳凰桐文彩繪	一握
一	髪上具	平額 釵子 髻	一具
一	几帳	白綾地桐鳳凰文繡	二枚

以下、法量の単位はセンチメートル

一	唐衣 <small>からぎぬ</small>	萌葱亀甲繫地菊花文二陪織物	一領
法	量	丈	八四・五
		桁	六二・〇
	文丈	二一・〇—二二・〇	窠間幅 一〇・一—一〇・二
	裏地	文丈 二・五	窠間幅 四・〇

品質形状

袷仕立て。表地は萌葱の二陪織物、裏地は濃萌葱の固綾を用いる。衿先に裏地と同裂で髪置きを付ける。袖口に施を取る。衿付けは裁切を用いる。表地は経緯濃さの異なる萌葱糸を用い経三枚綾地に地緯で亀甲文を、白絵緯糸で主文の菊花文を表す。

保存状態 良好。
裏地は緯三枚綾地に経六枚綾で繫菱文を表し、板引を施す。

一	裳 <small>も</small>	白穀織地鳳凰桐文彩繪	一腰
法	量	丈	一〇一・〇
		横	五六・〇
	大腰	縦	一八・〇
	引腰	縦	九・二
	引腰裏地	文丈	二・七
		窠間幅	四・〇

品質形状

裳は白穀織に彩繪を施す。幅約二五センチメートルの裂（生糸の穀織）を八枚接ぎ合わせ、鳳凰・桐・竹を顔料彩色する。単。裂端は縫付けず紙芯入りの糊捻りが施される。大腰・引腰の表は、窠に霞文の白浮織物に刺繡を施す。裏地に萌葱文の固綾を用いる。刺繡は白撚り紐二本を綴じて表す。大腰・引腰の裏地は唐衣裏地と同裂。
刺繡の止め糸に外れが見られる。



唐衣 表着



裳

一 懸帯^{かけおび} 萌葱亀甲繫文浮織地鳳凰桐文繡 二条
法 量 丈 一三六・五 幅 一八・五

品質形状 裏地 文丈 二・八 窠間幅 四・〇
拾仕立て。表地は萌葱の浮織物、裏地は濃萌葱の固綾を用いる。

表地は経緯濃さの異なる萌葱糸を用い経三枚綾地に緯浮で亀甲文を織り出す。裏地は緯三枚綾地に経六枚綾で繫菱文を表す（唐衣と揃い）。板引を施す。表地に鳳凰桐文を刺繡で表す。駒縫の留糸に外れが見られる。

一 表着^{うわぎ} 紅雷文繫地菊花文二陪織物 一領
法 量 丈 二〇五・五 衿 七四・五

品質形状 文丈 二一・〇—二三・〇 窠間幅 九・三
拾仕立て。表地は紅の二陪織物、裏地は紅の薄平絹を用いる。

袖口・衿口・裾に施を取る。表地は経緯濃さの異なる紅糸を用いて経三枚綾地に地緯糸で雷文を、主文の菊花文は白絵緯糸で表す。

保存状態 裾切れ、裏地の劣化が見られる。



懸帯

一 打衣^{うちぎぬ} 紅地繫菱文固織物 一領
法 量 身丈 二〇八・〇 衿 七四・五

品質形状 文丈 五・五 窠間幅 八・〇
拾仕立て。表地は紅の綾織、裏地は紅の薄平絹を用いる。袖口・衿口・裾に施を取る。表地は緯三枚綾地に経六枚綾で繫菱文を表す。板引き施す。

保存状態 裏地にやや劣化が見られる。

一 五衣^{ごぎぬ} 白地菊唐草文固織物 一領
法 量 身丈 二〇六・〇 衿 七五・〇

品質形状 文丈 一五・〇—一九・〇 窠間幅 一〇・〇
拾仕立ての衣（表地は白の綾織、裏地は紅色の薄平絹を用いる）を五領重ね、襟上や身頃裾など数点で綴付ける。袖口・衿口・裾に施を取る。衽裾に厚く真綿が入る。表地は経三枚綾地に緯六枚綾で菊唐草文を表す。

保存状態 裾切れ、汚れが見られる。



打衣



五衣

一 単 ひとえ

紅地幸菱文浮織物

一領

法 量

身丈 二一・〇

桁

七九・五

文丈 一〇・〇

窠間幅 一四・〇

品質形状

紅の浮織物。裂端は縫付けず糊捻りが施される。経三枚綾地に地緯の浮織で幸菱文を表す。

保存状態

良好。

一 下裳 したも

赤平地花樹文繡

一腰

法 量

丈 一〇五・〇

腰紐幅 八・〇

領幅 幅 一九・〇

丈 三八・〇

品質形状

袷仕立て。表地は紅の薄平絹、裏地は黄の薄平絹を用いる。通し腰は一枚裂を取り廻し、右捻・左捻の白撚り糸で腰帯と裳の重なりに大針小針を入れる。表地は茶撚り糸二本揃えの刺繍駒縫で花樹文を表す。

保存状態

駒縫の留糸に外れが見られる。



単



下裳

一 長袴 ながばかま

赤精好

二腰

法 量

(その一) 丈 一六一・〇

腰紐幅 二一・〇

腰前幅 四九・〇

(その二) 丈 一五四・〇

腰紐幅 一九・〇

腰前幅 五三・五

品質形状

袷仕立て。表地・裏地ともに赤色の生絹の精好を用いる。通し腰は一枚裂を取り廻し、赤の左右撚り糸で腰帯と裳の重なりに大針小針を入れる。通し腰は、腰に巻く部分を折り細くする。

保存状態

良好。

一 打袴 うちばかま

赤平絹

一腰

法 量

採寸不能

品質形状

(折りたたみから推測 丈 一六八・〇 幅 八八・四) 袷仕立て。表地・裏地ともに赤の平絹を用いる。表は板引きを施す。

保存状態

損傷が著しい。



長袴

一 檜扇 ひおうぎ

金雲鳳凰桐文彩繪

一握

法 量 縦 四四・〇

品質形状 檜の薄板を三十九枚重ねて金物で留め、上端を糸で縫い重ねる。

金雲、桐、鳳凰の彩繪を施す。要の金物は小禽、蝶を象る。飾り紐は、茶・萌葱・白・紅・黄を用いる。

保存状態 良好。

一 髪上具 かみあげぐ

一具

法 量 平額 長さ 一四・五 幅 一二・〇

釵子 長さ 一四・五 幅 二・二

髷 (その一) 長さ七八・〇 (その二) 七一・〇

品質形状 平額 下端に弦を切る円形の薄板に、三枚の花弁状の薄板を金具で固定する。円形の薄板には、凹凸により星梅鉢状の

装飾を施し、下部に二つの孔をあけ紫の紐を取り付ける。

釵子 棒状の金具を二カ所折り曲げる。

髷 頭髮を束ねる。

保存状態 良好。



檜扇 (表裏)



髷

平額 釵子

一 几帳 きしょう

白綾地桐鳳凰文繡

二枚

法 量 丈 一七九・〇 幅 二〇〇・〇

裏地丈文 一五・〇 窠間幅 一〇・二

幅筋 一八〇・五×六・五

丈文 一〇・四―一一・七

品質形状

三枚袷。表地は白無文綾に茶の糸で刺繍を施す。裏地に白茶菊
花文綾を、中陪に萌葱無文綾を用いる。いずれも生絹で、糊
捻りを施す。約四〇センチメートル幅の裂を五枚接ぎ合わせ、
それぞれの中央に紅地幸菱文浮織物の幅筋が計五枚垂れる。両
裂端に五色の飾り紐を附す。表地は茶撚り糸二本を揃え、駒
繡で桐・鳳凰・蝶・鳥を刺繍する。裏地は経緯異色で、経三
枚綾地緯六枚綾で菊花文を表す。

保存状況 駒縫の留糸に外れが見られる。

時代 江戸時代前期



几帳

人面付土器 頭部片 温江遺跡出土

一点

(考古資料・指定)

附 土器 残欠共 一二〇点

石器類 五点

与謝郡与謝野町字岩滝一七九八番地一
与謝野町立農村文化保存伝習センター保管

法 量 残存高 八・五センチメートル

顔の長さ 九・二センチメートル

顔幅 五・六センチメートル

奥行き 七・一センチメートル

時代 弥生時代

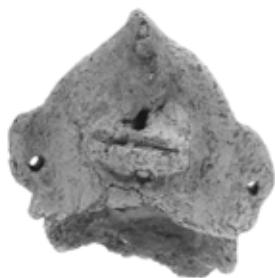
温江遺跡は与謝郡与謝野町字温江・加悦に所在する弥生〜平安時代の集落遺跡で、人面付土器頭部片は、平成二〇年度に検出した東西約一〇〇メートルの弥生時代前期集落の西を限る環濠から、多量の弥生土器とともに出土した。この環濠は幅一・六メートル以上、深さ一・一メートルで断面はV字状をなす。

人面付土器頭部片は、残存高八・五センチメートル、顔長九・二センチメートル、顔幅五・六センチメートル、奥行き七・一センチメートルで、首から下を欠損する。土器口頸部や蓋に付けた把手状の装飾と思われるが、共伴土器片のなかに接合する個体はなく、器種・器形は不明である。人頭部を写実的かつ立体的に表現しており、とくに頭頂部から後頭部にかけて作り出した鶏冠状突起が特徴的である。

鶏冠状突起は額から緩やかに立ち上がり、耳のうしろの後頭部付近でお



人面付土器



背面



弥生土器

わる。突起がおわる部分には直交する楕円形突帯を貼り付ける。楕円形突帯上には横一条の線刻を施し、上下方向に穿孔する。現状では孔内に白色砂粒が詰まるが、上下の孔の位置が合致するので貫通している可能性が高い。鶏冠状突起と合わせて、髪を束ねて後方に延ばして折り曲げ、櫛か簪で留めた状態を表現していると解釈できるだろう。

目と口は線刻で簡単に表現するが、鼻と耳は粘土を貼り付けて立体的に作り、鼻には二つの孔を、左右耳には各一つの孔をあける。耳の孔は耳たぶ位置で貫通するので、外耳道ではなく耳飾りの孔を表現したものと推測される。眉上の隆起も、鼻からつないで粘土紐を貼り付けて立体的に表現する。入れ墨の表現はない。

頭部正面側は表面を丁寧なナデによって仕上げるが、後頭部の仕上げは粗い。首部の破断面は不整形ながらほぼ平らで、前後方向で長径約六センチメートルの楕円形をなす。内部は中空で粘土紐を積み上げて作った状態が観察できる。胎土は精良で、一ミリメートル弱の白色砂が混じる。焼成

は良好で淡茶褐色を呈する。

顎、上唇の上部、額の各部分に朱色の斑点があり、頭頂部の突起付近にも赤黒い発色が観察できる。理化学分析の結果、顎の赤色斑に有意差は認められないが、頭頂部の赤黒い部分には鉄分が多く、人為的にベンガラを塗布したと推測できる。東奈良遺跡（大阪府茨木市）で出土した弥生時代前期の人面付土器は、表面に朱と漆を塗布しており、温江遺跡の人面付土器も部分的もしくは全体的に赤く彩色していたと思われる。

西日本における弥生時代前期の人面付土器の出土例は一〇例未満と少なく、いずれも首より下を欠損して完形品はない。西川津遺跡（島根県松江）出土例は蓋の把手として機能したと推定されているが、器種・器形のわかる例はほとんどない。ただし、東日本では再埋葬用の蔵骨器として使用された壺形土器の口頸部に、人面を表現する例が多い。

また、西日本で出土した弥生時代の人面付土器や人面を表現した絵画には、温江遺跡の人面付土器頭部片と同様、鶏冠状突起を表現したものが目立つ。鳥装の司祭者を表現したとする説、髪型風俗を表現したとする説などがあるが定説はない。写实的かつ立体的な温江遺跡出土の人面付土器頭部片は、こうした研究課題にも資する点が大きい。

京都府内では縄文時代の土偶八点以外には、森本遺跡（向日市）の弥生時代後期の水路から出土した人面付壺形土器顔面部片（京都府指定有形文化財）があるのみである。

温江遺跡出土の人面付土器頭部片は、頭部がほぼ完存し、ベンガラの塗布痕跡を残し、その写实的・立体的な表現とともに、信仰・習俗など弥生時代の文化を理解する上で、きわめて貴重な京都府を代表する考古資料である。

なお、人面付土器頭部片と共伴した弥生土器は、ほとんどが破片で、東側の集落から廃棄されたものと考えられるが、壺・甕・鉢・鉢・蓋など多様な